大好き☆出雲！

よすみちゃん

弥生の出雲王に出会える

出雲弥生の森博物館だより
IZUMO YAYOINOMORI MUSEUM

季刊
第49号
（2023年4月）

出雲弥生の森まつり2023

4月29日（土・祝）開館記念日

オープニングイベント

出雲商業高校
書道パフォーマンス
9時30分～10時

有料 **古代体験フェスティバル** 10時～15時

ミニ丁銀づくり
古代出雲歴史博物館

プラ板グッズづくり
荒神谷博物館

古代瓦文様のうちわをつくろう
八雲立つ風土記の丘

勾玉消しゴムづくり
出雲弥生の森博物館

▲古代瓦文様うちわ
▲プラ板
▲勾玉消しゴム
▲ミニ丁銀

無料 展示ガイドサービス
- 常設展館長ガイド 10時～11時
- 企画展 11時～12時
- ギャラリー展 13時～13時30分
- 速報展 14時～14時30分

無料 西谷墳墓群ガイドサービス 10時～15時

4月30日（日）

オープニングイベント

三谷神社獅子舞保存会
子ども獅子舞 9時30分～10時

無料 X＋（えくすと）ステージライブ
① 11時～11時30分
② 14時～14時30分

無料 博物館探検隊 10時～11時

無料 よすみちゃんクイズ 13時～14時

4月29日（土・祝）・30日（日）

有料 屋台村・喫茶コーナー 10時～15時

4月30日（日）

有料 屋台村 10時～15時

5月3日（水・祝）～5日（金・祝）

無料 キャラ探しスーパー

5月6日（土）

有料 缶バッジ・勾玉づくり

5月7日（日）

無料 よすみちゃん折り紙教室

5月3日（水・祝）～7日（日）

無料 「よすみちゃん」「みすよちゃん」と写真を撮ろう

★春季企画展
「平安時代の出雲 ―人びとのくらしと祈り―」
3月4日(土)～5月29日(月)

平安時代と言えば、皆さんは何を想像されるでしょうか。

簡単に言えば、平安時代とは、都は平安京にあり、天皇を頂点とする貴族が支配階級として政治、経済をリードした時代です。

遣唐使が廃止されたことで、新たな建築様式の寝殿造が登場し、男子の正装・衣冠束帯や女子の正装・女房装束(十二単)が定形化するなど、日本独自の国風文化が発達した時代でもありました。かな文字が出現し、清少納言の『枕草子』や紫式部の『源氏物語』など優れた文学作品も著されました。

おそらく平安時代について、多くの皆さんはこうしたイメージをお持ちではないでしょうか。ただし、これらは都の貴族のことです。

それでは、平安時代の出雲はどのような様子だったのでしょう。

歴史書に多く残るのは、不作・飢きんの記録です。前期(9世紀)を通して、8度あったことが分かります。科学的な研究によれば、当時の夏は極端な高温と低温を繰り返していたことが明らかになっており、天候不順が原因であったようです。そうした中で、疫病が流行した年もありました。さらに、元慶4年(880)には出雲で大地震が起きました。神社や寺院、役所、百姓の家など多数の建物が倒壊し、10日間揺れ続けたと記録に残っています。

まさに天変地異が頻繁に起きた時代で、人びとは厳しい環境の下で暮らしたことを感じさせます。

また、遺跡の発掘調査を通しても当時の様子を知ることができます。その一つに、九景川遺跡(東神西町)の例があります。

この遺跡では、奈良時代から平安時代初め(9世紀前半)にかけて、多くの建物が計画的に建てられ、墨書土器や硯なども見つかることから、周辺の中核的な集落であったと考えられます。ところが、9世紀後半以降の遺物は全く出土しないため、集落から人びとが去ったと考えられるのです。とりわけ、9世紀半ばが飢きんの頻発した時期に当たり、この集落に何かが起きたと想像されます。

上長浜貝塚(西園町)でも同様な動向が見られます。この遺跡は、当時、日本海と入海(神門水海)に挟まれた環境にあって、漁労や塩作りなどを行う集落が付近にあったと考えられます。

初めに貝塚が形成されたのは、奈良時代から平安時代初めのことでした。製塩土器が多量に見つかり、近くの集落で塩作りが盛んだったと分かります。ところが、中期(10世紀前半～11世紀前半)に再び形成された貝塚では、製塩土器がほとんど見つからなくなるのです。つまり、9世紀後半に塩作りをやめたのでしょう。この変化も飢きんが関わるかもしれません。

今回の企画展では、こうした平安時代の出雲の世相を考古資料を中心に考えてみたいと思います。

(髙橋　周)

上長浜貝塚の調査の様子

★ギャラリー展
「ハエのさなぎから探る 古代の葬式」
3月1日(水)～7月3日(月)

出雲弥生の森博物館では、ハエのさなぎが付着した副葬品を展示し、古墳時代の「モガリ」について少しずつ紹介してきました。

古墳時代の葬式は、「葬前」⬇「モガリ」⬇「本葬」⬇「葬後」と進みます。身分の高い人が亡くなると埋葬する前に遺体をモガリ屋に安置します。時間をかけて「死の確認」を行いながら、死者の鎮魂を願いました。この期間の儀礼が「モガリ」です。

古代のモガリは、文献を解読することで研究が進められてきました。今回の展示では、ハエのさなぎが付着した出土品を通して、弥生から古墳時代のモガリについて詳しく紹介します。

ハエの成虫は明るいところで活動するので、イエバエ科などのさなぎが付着していれば、遺体と副葬品は死後すぐに真っ暗な埋葬施設に納められたのではないことが推測できます。出土品に付着するさなぎを調べることで、古代のモガリの実態がわかってくるのです。

島根県内では、計5か所の古墳や横穴墓からハエのさなぎがみつかっています。出雲市内では、斐川町結11号墳の鉄剣にハエのさなぎが付着しています。この他、安来市仲仙寺2号墳の鉄鏃、同市鷺の湯病院跡横穴墓の刀子、浜田市めんぐろ古墳の鉄剣、隠岐の島町大座1号墳の大刀と鉄斧にも付着しており、いずれも5～6世紀の埋葬施設の副葬品です。

埋葬施設に伴うさなぎは、西は宮崎県から北は新潟県、東は群馬県までの59か所で確認されています。展示では、島根県・鳥取県・奈良県で確認されるハエのさなぎを中心に、弥生から古墳時代のモガリについて紹介します。

出土品から探るモガリの展示は全国的にもあまりありません。この機会に、古代の「葬式」について考えてみていただければ幸いです。

（坂本 豊治）

モガリ中

★速報展「旧大社駅瓦のデザイン」開催中～5月29日(月)

明治時代のはじめに、わが国に西洋建築の技術が導入されました。一方その技術を受容する中で、明治の中ごろから、日本の伝統建築が注目されていきます。日本にふさわしい建築をつくろうとする動きから、建物全体の構造を「西洋風」でつくり、外観を「和風」の意匠とする方法が生まれます。

日本の伝統を生かす新しい様式は、後に「近代和風建築」と呼ばれるようになります。大正13年（1924）に建設された旧大社駅本屋は、「近代和風建築」の傑作として、平成16年に重要文化財に指定されました。

今回の速報展では、現在実施中の旧大社駅保存修理事業において、一旦取り外された実物の瓦を紹介し、旧大社駅の「和風」の魅力に迫ります。

（吾郷 誠）

★古文書の森をゆく⑭ 船宿の帳簿

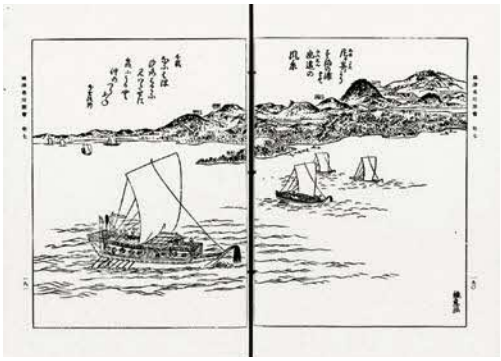
江戸時代、大規模輸送の主役は廻船で、米や塩など様々な荷物を満載して全国を廻りました。航行途中で廻船は、各地の港へ寄港して休んだり商売をしたりしました。

その際に宿泊したのが船宿です。船宿とは船乗りを対象にした宿で、船の航行に必要な物資の補給や、積み荷の売買の中継ぎ、また時には役人に代り入港料の徴収を行うなど、宿泊だけでなく船に関わる多種多様な業務を一手に担っていました。

かつて船宿を営んでいた家の古文書には利用した船と船乗りの記録などが残っており、様々な地域から船が出雲へ来ていた様子が窺えます。

鷺浦（大社町）の船宿の記録では、地元山陰の船を除くと、最も多い利用者は能登・加賀（石川県）、ついで越中（富山県）と、北陸から東北にかけての北国が上位を占めています。これらの利用者が船宿を経由して売った品物の記録を見ると、津軽（青森県）や庄内（山形県）の米や、越後（新潟県）の小豆・大豆など全て東北産の穀物でした。これらの売買記録は詳細な計算に基づいて記録されており、俵一つ辺りの重さ、産地など様々な情報が分かります。米の状態によっては値引きされたものもありました。例えば「沢手米」や「濡米」と書かれた物は船での輸送中に波を被ったり雨水で濡れたりして損傷した米のことを指します。濡米も取引されていますが正常な米の価格の六割程度まで引かれており明らかな損失だと分かります。一見すると味気ない記録簿も、読みとけば当時の物流の様子や港の賑わいについて窺い知ることができる、興味深い史料なのです。

（荒川 英里）



『摂津名所図会』第七巻
（国立国会図書館デジタルコレクションより）

★展示のご案内

▼春季企画展
開催中～5月29日(月)
「平安時代の出雲
―人びとのくらしと祈り―」

●ギャラリートーク
5月20日(土)10時から

▼ギャラリー展
開催中～7月3日(月)
「ハエのさなぎから探る
古代の葬式」

●ギャラリートーク
4月16日(日)
5月13日(土)
6月4日(日)
いずれも10時から

▼スポット展
好評開催中～5月29日(月)
「旧大社駅　瓦のデザイン」

★イベントのご案内

▼出雲弥生の森まつり2023
4月29日(土・祝)・30日(日)
5月3日(水・祝)～5日(金・祝)
5月6日(土)・7日(日)

★講座・講演会のご案内

▼職員リレー講座

①6月4日(日)14時～16時
「ハエのさなぎから探る
古代のモガリ」
●講師　坂本 豊治
(博物館学芸係)

②6月24日(土)14時～16時
「中世の古志遺跡群
～近年の発掘調査から～」
●講師　須賀 照隆
(埋蔵文化財1係)

③7月8日(土)14時～16時
「鳥居～日御碕神社鳥居
保存修理事業から～」
●講師
吾郷　誠(文化財保護係)
黒田 祐介(埋蔵文化財1係)
●受講料　各300円
●オンライン配信予定
受講ご希望の方は、氏名・お住いの市町村名を、当館宛てにメールでお知らせください。
※オンラインの場合、受講料は無料です。

講座・講演会の申込について
定員80名　当日受付なし
事前申込必須(電話・FAXのみ)
●申込受付時間　9～17時
●必要事項　氏名・電話番号・住所

★館長古来夢(こらむ)

今年、トンデモないモノが大和の古墳から見つかった!とのニュースが駆け巡った。富雄丸山(とみおまるやま)古墳。奈良市にある日本最大の造出し付円墳(直径百九メートル)だ。

富雄丸山古墳から明治時代に盗掘された副葬品は、現在、京都国立博物館に所蔵され重要文化財に指定される。1972年に奈良県が墳頂部に埋葬施設を確認。その後、2017年から奈良市が継続的な調査を行っている。

今年度は、三段の造出しの最上段にある粘土槨(ねんどかく)(長さ6.4メートル)が調査された。粘土槨とは「割(わり)竹形(だけがた)木棺」を粘土で密封した埋葬施設だ。この木棺を覆う粘土から鼉竜文盾形銅鏡(だりゅうもんたてがたどうきょう)一面と蛇行剣一本が発見された。表(鏡面)を上に向けて鏡を置いたのち、剣を横たえたらしい。

盾形銅鏡は、長さ64センチ、幅31センチ、重さ5キロ超。盾の形をした鏡は例がない。裏(背面)の中央に紐を通す突起(鈕)があり、その上下に倭国製の鏡に認められる鼉竜(想像上の動物でワニの一種か)文が二つ表現され、その他の部分はおびただしい数の鋸歯文(きょしもん)(三角文)が埋め尽くす。鏡を木棺の周りに並べる手法は、奈良県黒塚古墳などにある。やはり表を上に向ける。鋸歯文は、革製の盾の縁取り文様によく使われるから、その外形からしても盾のもつ防御力と邪悪なものをリフレクトする鏡の神聖な輝きを一体化した最強のハイブリッド呪物だ。

かたや蛇行剣はくねくねと折れ曲がった剣身を特徴とするが、この剣は2.67メートルもの長さの日本最大の剣。これにはどんな悪霊も太刀打ちできないだろう。

「国宝」間違いなしの二つの副葬品だが、埋葬施設には木棺が良好な状態で残っているらしい。ちょっとでいいから、掘ってみたいなぁ。

(花谷　浩)

(発行)出雲弥生の森博物館
2023年4月
〒693-0011
島根県出雲市大津町2760
(TEL) 0853-25-1841
(FAX) 0853-21-6617
(E-mail) yayoi@city.izumo.lg.jp
http://www.city.izumo.shimane.jp/yayoinomori
●入館料/無料
●開館時間/9:00～17:00
(入館は16:30まで)
●休館日/火曜日
(祝日の場合は翌平日)
年末年始